

法隆寺金堂壁画における「複写と模写」

平成28年度 活動報告

本事業では、法隆寺金堂壁画の模写事業(1940～49年の焼損まで)に従事した入江波光と門下の画家たちが残した資料の調査を通じて、京都班にまつわる記憶のアーカイブ化を進めてきた。

金堂壁画の模写は、4名の画家が各々助手を率いて班を編成し、それぞれに壁面を担当する形で行われ、東京から3名、京都からは入江波光が選出されている。模写は日本画の方法で行われることになったが、入江率いる京都班のみは、写し方について、他の3班と異なる選択をしている。

東京からの3班が、和紙に印刷した原寸大のコロタイプに着色する方法をとったのに対し、京都班はすべて肉筆で描き写す、「上げ写し」という方法で模写制作に臨んだ。

このような京都班の制作姿勢に迫るべく、模写事業に関する書籍や手紙や写真などを収集しアーカイブ化を行った。また、入江は本学の模写教育の基礎を築いた人物であるため、同時代の模写がどのようなものであったのかを調査する意義は大きいと考え、並行して、立命館大学アート・リサーチセンターに協力を頂き、本学芸術資料館所蔵の模写作品のアーカイブ化を進めてきた。その結果、模写に関する資料が充実し、本学が模写をどのように考えてきたのか、様々な観点から考察する下地が整いつつある。

この調査結果を踏まえ、一昨年度から取り組んできた本事業の成果の一つとして、本研究センターの特別授業において、プロジェクト・リーダーである彬子女王殿下が講演を行った。この講演を通して女王殿下は、入江の言葉や班員が白装束で模写制作に臨んだことなどを例に挙げ、京都班の模写は壁画の保存や記録の他に、原作者の精神に迫る、祈りという側面を持っていたことに触れた。また同講演の中で、金堂壁画の模写は職人の技術に支えられている点にも言及し、模写制作に使われた神宮紙やコロタイプ印刷を紹介した。

この様な経緯から、便利堂を訪れてコロタイプ印刷の製造工程を視察した。複写や印刷は、人の手よりも機械やテクノロジーを連想させるが、コロタイプの印刷技術は、想像以上に職人の感覚に支えられていた(例えば、古色の色彩再現は、機械的な数値化に頼らず、職人の経験値と記憶に支えられている)。これは、「うつし」を考える上で、一つの重要な視点となるだろう。今後は、コロタイプ印刷や複製品を含めてより柔軟に、本校における「うつし」についての考察を深めていく予定である。

川嶋 渉(美術学部准教授)